

■ 書 評 ■

《神経心理学コレクション》 レビー小体型認知症の臨床

小阪憲司，池田 学 ● 著
山鳥 重，彦坂興秀，河村 満，田邊敬貴 ● シリーズ編集

東京女子医科大学名誉教授／メディカルクリニック柿の木坂院長 岩田 誠

臨床家にとって最もやりがいのある仕事は，それまで誰も気づいていなかった病気や病態に世界で初めて気づき，それを世に知らしめることである。最初は，自分の小さな気づきがそれほど大きな意味を持つとも思わず，単に多少の興味を惹かれた事実を記載するだけである。それが大発見であるというようなことには，世間一般だけでなく，発見者当人もまだ気づいていない。当然のことながら，その記載は世の中に大きな反響を呼ぶほどのものにはならず，小数の臨床家の記憶の隅にしまわれるだけである。しかし，時間が事の重大さを明らかにしていく。世の中の人々が，同じことに気づきだすと，その最初の記載が大きくクローズアップされる。そして世間は，その発見が日常の臨床の場での，緻密ではあるがごく日常的な観察に始まったことを知る。臨床家が毎日飽きもせず患者に接しているその営みの中から大きな発見がなされ，医学の歴史の新しいページが開かれていくとき，いつも繰り返されるこのプロセスは，現在最も注目を浴びている変性性デメンチアの1つであるレビー小体型デメンチアにおいても然りであった。この書物は，その発見者である小阪憲司先生が，後輩である池田学先生にその気づきのプロセ

スを語っていく書物である。これを読む人は皆，臨床家の観察というものが，いかに大きな発見につながっていくかを知り，感動を覚える。聞き手の池田先生も，臨床の場において次々と大きな発見を成し遂げてこられた方であるだけに，お2人の対談は，そういう臨床の場における発見の意義を生き生きと示す興味深い読み物となっており，ワクワクしながらこの病気の発見史をたどっていくことができる。

真の観察者は，患者の臨床症状であれ，その病理所見であれ，それらを単なるデータとして観察することはない。アルゴリズム的な考え方に従って，観察すべき所見の有無を記入したり，検査に頼ってどこそこの血流量がどのくらい減少しているかを測定したりするだけの行為は，単なるデータの収集であって観察とは言えないのである。小阪先生が脳皮質の神経細胞の細胞体中に何か不思議な構造物をみつけても，その患者の示していた特異な臨床像をみていなかったら，この病気の発見はもっと遅かったに違いない。臨床家としての観察力と，神経病理学者としての観察力が見事に合体した結果が，この発見につながった。したがって，評者はこれを，単に1つの病気の臨床像や病理像に関する最新の知



見を教えてくれるだけの書物とは思わない。確かに，この本を読めば，レビー小体型デメンチアに関する知識を余すことなく知ることができるのは事実であるが，この病気の発見者が，本書を通じて読者に伝えたかった真のメッセージは，臨床医学の方法論だったのではないと思う。小阪先生の観察方法は，決して今日的なハイテク技術を駆使したものではない。それは古典的な地味な方法論に基づくものではあるが，大発見につながったのはその徹底的な観察であった。脳皮質の神経細胞の中にレビー小体を見出すことは，それがあることがわかっている症例においてさえ容易ではなかったと，池田先生が述べておられるが，そのような実体験を経ることによって，小阪先生の偉業が真に理解できる。この書物は，臨床医学における観察の意味とその重要性を示す，偉大な観察者のかけがえのない言葉に溢れている。

A 5, 頁 192, 2010 年

定価 3,570 円 (本体 3,400 円 + 税 5%)

[ISBN978-4-260-01022-1]

医学書院刊